哲學研究　第二號　第一卷第二冊

社會意識の成立

高田保馬

時代精神と云ひ、或は國民精神と云ひ、或は輿論傳說、群衆の主張と云ふが如きものは皆、一種の社會意識なり。此の如く社會意識は其種類極めて多く、從ひて性質の極めて多樣なるものを含めども、なほ其間共通の性質なきに非ず。而してこの共通の性質こそかゝる多樣の現象をして同じく社會意識たらしむるものなれ。勿論かゝる性質の如何なるものなるかは、學者によりて夙に其大體を理解せられたるも、其詳細の規定に至りては未だ明ならざる所多し。然れども、社會成員の間に共通なる心的內容にして、而も共通なりとの意識を伴へるものなりと云ふは從來現はれたる最

良の見解なりと信ず(1)。たゞ吾人は共通なる心理內容と云ふを制限して共通なる卽ち方向共同なる欲望なりとなさむと欲す(2)。かくて、若し社會意識とは何ぞやと問ふものあらば吾人は成員に共通なる欲望にして而も共通なりとの意識を伴へるものなりと云はむ。然れども、此定義にあげたる規定は日常吾人が社會意識を考ふるに際し明なる意識に上り來るもののみにして、更に其背後に隱れて、立入りたる分析を行ふにあらざれば、知らるゝ事なき要素あり。これ結合の意識と成員の慾望の共通なりとの意識なり。かくて、社會意識の要素として擧ぐべきものは左の三となる。

(一)結合の意識。
(二)成員の欲望の方向共同なりとの意識。
(三)共同方向なりと信ぜらるゝ欲望。

從ひて社會意識の成立と云ふも此三要素の成立に外ならず。其成立の過程を說くは此小篇の目的なり。

以上の三要素のうち、社會意識の內容を成すものは第三者のみ。前の二者は內容が如何に變化するに拘はらず、常に相伴へる要素なるが、內容たる第三者は單獨にて

は何等社會意識を形成する事能はず、たゞ前二者をまちて社會意識をなすと云ふ點より見て、之を內容に對する形式と稱する事を得可し。形式たる前二要素は社會意識の恒常的要素たり、內容たる第三要素はその可變的要素たり。社會意識成立の問題の中心をなし、從つて困難と興味とに富める部分は第三者に關す。然れども順序として先づ、前二要素の成立よりこれを說かむ。

社會意識の成立は社會の既存を豫想す。この事極めて明白なるに似て、而も誤解を招き易し。たとへば群衆の如き公衆の如き、其間に化成せらるゝ共同的慾望は一種の社會意識たるに相違なきものなるが、此等の集合は、此社會意識の化成をまちて一の社會と轉化したるに似たり。而もこは全く視的錯覺なり。例へば群衆の成員はもとより平素相知らざる路傍の人多からむ。而も彼等は既に結社的生物として群居の本能を有す、否既に業に同一民族に屬し恐らく同一の地方自治體に屬し言語と風俗、習慣とを同じくす。集合する所豫め無言の裡に意志の相互的理解あり。かくの如く既に結社の存したる故にこそ、容易に其間指導者を生じこれに統一せらるゝを得るなれ、共同的慾望の形成は結社の後に來れるものにして、決して、此形成によりて結社の生ずるに非ず。況んや其他の社會と社會意識の關係をや。勿論、既に存

在せる社會が、社會意識によりて其團結を加ふることは普通の事實なり。然れども、社會の存せざる所、社會意識の先づ無より生じやがて社會を齎すと云ふが如きは全然あり得可からざる事なり。かくて、社會意識の成立は云ふまでもなく社會の既存を豫想す。

社會の存在は既に社會意識の要素として擧げたる前二者の存在を意味す。先づ社會の存在に伴ひて其成員の間に結合の意識の存在する事云ふまでもなし。然れども、此結合の意識はそのものとして何等社會意識の要素をなすものにあらず。結合の意識は常に其背後に於いて被要求または義務の意識を含む。此被要求の意識こそは實に社會意識の拘束力の根柢をなし、從ひて社會意識の最も重要なる一要素を形成するものと云ふべきなり。元來、社會の結合は相互の愛着に外ならざれども、此愛着は其裏面に犧牲の提供と收受とを意味す。相結合せるものは必要に應じて常に或度の犧牲を他人に要求するを得ると共に、また、自らこれを他人に向ひて提供するの用意と責任とを有せざるべからず。かるが故に社會結合の意識は自から、他人の勤勞奉仕を期待し得と云ふ意識を伴ふのみならず、何時にても他人に或程度の犧牲を提供せざる可からずして、此犧牲を常に他人によりて要求せられ居れりとの

意識の伴ふを免れず。而して此要求は一方社會の各成員より來るべきものなれども、他方、各成員の要求は相合して一團となり、吾人自らには、平常社會によりて要求せらるることの意識として感ぜらる。社會結合の意識は、常に奉仕者援助者を有すと云ふ意識を含む點に於いて利益の意識なれども、かゝる意識を含む點に於いては負擔苦痛の意識なりと云はざる可からず。

勿論社會の結合は其如何なる種類のものたるを問はず一樣に、かゝる被要求の意識を生ずるものとは云ひ難し。社會の結合に二種あり、直接的間接的これなり。直接的と云ふは利益協働等の理由を離れ、たゞそのものゝ故に相愛着したる結合を指し、間接的と云ふは、人そのものゝ故に非ず、その人に依りて得らるゝ何等かの利益の故に生じたる結合を意味す。勿論こゝに利益と云ふも、そは決して、單に金錢的物質的利益に限るにあらず。或は、思想信仰或は趣味等を一にするものゝ相親しみ相集まる如きまた利益による結合と見ざる可からず、蓋し彼等は其思ふ所信ずる所を一にするが故に、相結合して、或は反對者に對して其一にする所を辨護せむとし、或は知識信念を交換し激勵せむとす。他人に愛着するは其人の故に非ずして、其藏する文化的內容のゆゑなり。而して此意味に於ける間接的結合に於いては、所謂犧牲の交

換と云ふもの極度までに減縮して殆んど無きに近し。從ひて自ら他人に犧牲を要求し得ざる代りに、他人によりて要求せらるゝことなし。社會結合の意識も被要求の意識を伴ふこと極めて乏しと云はざるべからず。たゞ、直接的結合に至りては然らず。間接的結合が利益の交換を意味するに對しこは寧ろ犧牲の交換を意味す。そのものゝ故に相親和したるものは相手よりして何等の利益を期待せずして、而も自ら犧牲を拂はむと欲し、從ひて相手にも此犧牲を要求す。これ此種の結合の本質上當に然るものにして、此種の結合の意識が要求の意識を伴ふもの、斯る事情あるによる。然れども此種の結合の如く強度に差等あるものなし。僅に面識を有する知人よりして相愛の極情死するほどの愛人に及ぶ。拂はるべき犧牲の大さは結合の強度に比例するが故に、被要求の意識もまた結合の強度に比例する事は云ふまでもなし。日常偶相接する友人の間に何等明確なる社會意識の成立し得ざる理由の一はこゝにあり。然れども、此結合の強度以外被要求の意識を制約する一因素あり。そは結合に本づく要求が集團的なりや否や、換言すれば、結合せる相手が一集團をなせりや否やと云ふ事なり。被要求の意識卽ち負擔の意識は相手の要求の反映に外ならず。然るに其相手がたゞ個人的なる要求を有するに過ぎざる時は、その要求の

意識や極めて輕し。若し、彼等が一團をなし、同種の要求を吾人に對して有する場合に於いては、吾人はこれを其集團の要求と見、從ひてこれに對して強き被要求の意識を有す。かるが故に結合の程度強きものにても、相手が社會的團結を形どらず、個人たる資格に於いて吾人と結合する場合に於いては、吾人の感ずる被要求の意識は云ふに足らず。たゞ相手が社會をなせる場合に於いては、吾人は強き被要求の意識を有す。かるが故に強き被要求の意識は常に、直接的にして且つ一團體を形成せる結合の意識にのみ伴ふものなり。

吾人は第二の要素として、成員の欲望の方向共同なりとの意識を擧げたり。こは一定の欲望が各成員に於いて方向を共同にすとの意識と解す可からず。一般に何等かの欲望が各成員を通じて方向を共同にすとの意識なりと見ざるべからず。而して、社會結合の意識は吾人をして常に此方向共同を意識せしめざる能はず、蓋し、社會は「時として死する事あれども、死する事を欲せず。」既存の社會が成員を促して其存續に努力せしむるは自然の事實なり。然るに社會の存續は其成員の間に欲望の共同方向をとるものありてのみ可能なり、方向の相背馳するもの一を加ふれば存續に對する危險は其一を加ふ。かるが故に、成員は常に、社會の存續せざるべからざる

以上、必ずや彼等の欲望の共同方向を取るに至るべく、また取るに至らざるべからざるを知る。かくて、何等かの欲望が必ず共同の方向を取るべきことは社會成員の間に自ら生じ來る確信なり。而して、此の如き欲望はやがてこれ自己に對する一の要求を含むを知る、これに背いて、方向を異にする欲望を抱かば、これ社會の自己に要求する所を捨てて顧みざる譯なり。此第二要素と第一要素と相結合する所こゝに社會意識に對する服從又は拘束の豫期ありと云はざる可からず。即ち社會が必ずや統一せる要求を有すべく、自らまた此の要求に背き得ざるを意識すとせむか。これ方向共同の一定欲望(統一せる要求)の來るをまちて自から拘束を準備するのに非ずして何ぞや。

さて以上の二要素は社會の存在に伴ひて既に存在す。而して一切の社會意識は皆此二要素を含み、これを含むに於て始めて社會意識と化す。然らずばこれたゞ個人的なる欲望の集合に外ならざらむのみ。一定內容の欲望もこの二要素と相合してはじめて社會意識、となるとせば、これ即ち社會意識の形式と稱す可きに非ずや。欲望の共同方向の意識、被要求の意識の存在するところ、即ち、「社會に統一せる欲望あるべくこれに對してはたゞ拘束せらるゝ外なし」となせる意識の存在するところ、一

定の欲望こそはかゝる共同方向のものなりと知らしむれば、此欲望は直に既存の意識と相合して、拘束力を得來り、こゝに社會意識の內容をなす。從ひて、社會意識成立の殘れる過程は共同方向を有すと信ぜらるゝ欲望の成立に外ならず。

一々の欲望內容はたゞ既存の形式と相合し其中に入りこむ事によりてのみ社會意識の內容をなすことを得。而してこの形式は不變にして普遍なり、一切の內容を盛りて壞れずまた溢れず。容器が一にして內に交る交る無限に多種なる液體を藏するが如く、刻々に新なる欲望は此の形式の中に藏せらる。また例へば、吾人が理性の形式と經驗の素材との如し。經驗の素材は無限に多樣なれども普遍なる形式は盡く之を容れて經驗を成立せしむ。然れども此內容と形式との聯關は如何にして行はるゝか。液體をして容器に入らしむる手の働、素材をして形式と合一せしむる認識の主觀に當るものは此場合果して何ぞ。曰くそは、一定の欲望が社會成員の多數に共通なりとの意識に外ならず。而もかゝる意識の成立し得むがためには、豫め一定の欲望が或る程度まで成員に共通ならざるべからず。かくて、社會意識成立の殘れる過程と云ふは、此或程度まで共通なる欲望の成立及び、そが共通なりと信ぜらるゝに至る過程に外ならざるなり。

社會意識の內容をなす所の欲望はもとより成員の全部に共通なる事を要せず。たゞ其大部分に共通なるを以て足れりとす。否その大部分に共通なりと信ぜらるれば則ち足れり。而も、かく信ぜらるゝがためには成員の少くも一部分間にかゝる欲望の存在せざるべからず(3)。かゝる共通的存在は如何なる道行によるか。但し此際注意すべきは此社會意識の內容をなす可き欲望の種類なり(4)。個人を中心とし個人か個體として自我の爲にする要求以外何物をも意味せざる欲望、たとへば飲食の欲、性欲、支配の欲等の如きは、社會の全成員に共通なりとも、永刧社會意識の一斷片をも形ることと能はず。たゞ個體が社會我のためにする要求を含める欲望、例へば國家の存續發達を計らむとし、社會に同一の思想信念を與へむとする欲望の如きは、そが共通なりと信ぜらるゝに及びて、社會意識の內容を形づくる。換言すれば集中的排他的にして自らこれを抱くも他人の之を抱くことを必ずしも欲せざる欲望、自己一身の狀態の變化を以て滿足せらるゝ欲望は前者に屬し、連帶的にして自らこれを抱く時は同時に他人の之を抱かむ事を欲する欲望、自己一身の狀態の變化を以て滿足せられざる欲望は後者に屬す。一は排他的にして他は連帶的、一は自我の狀態を努力の標的とし、他は社會我の狀態を努力の標的とす。

連帶的なる欲望の少くも一部多數の成員に共通となるに至るには、豫め成員の間に類似の存するを要す。吾人は今此類似が如何にして發生し來れるかを問ふの要なし。兎に角に、此類似の存在は同時に欲望の平行を意味す、此欲望は必ずしも連帶的のものゝみを指すに非ず。此欲望の平行は事實に於いて社會の成員によりて認められ、從ひて社會意識の一部を成せる事ありと雖も、理論上、社會意識の構成を說かむとする場合なれば、姑くかゝる事情の附帶せざるものと認む。既に欲望の平行せるものあるに際し、自然的社會的の事情は常に新なる刺激となりて各成員の意識に新なる欲望を發生せしめざる能はず。而して此新に發生したる欲望は既存の欲望に對して、目的と手段、本と末の關係に立つ。既存の欲望は目的たる欲望なるが、環境の事情が新しき刺激として來るに應じ、此目的に到達せむがために、其手段となる欲望、特定と具體的との二性質に於いて一歩を進めたる欲望を生ず。換言すれば新なる事情が刺激となりて此新しき欲望を喚起したるに外ならざるなり。目的たる欲望が、連帶性を有すると否とに拘はらず、手段たる新欲望には連帶性を有するものあり。ただ前者が連帶性を有する場合には後者もまた之を有すること多しとす。而して、新なる事情は社會の殆どすべての成員の上に刺激となりて作用するものなる

が、各成員の間に目的たる欲望の平行ある以上、此共通なる刺激は自ら、成員の間に手段たる欲望の共通と云ふ事實を伴ひ來るに相違なし。かくて連帶的欲望の共通、卽ち欲望の共同方向と云ふ事實は、欲望の平行を母とし、同樣なる刺激を父として、其間に生れ來る。共通なる欲望はかくて根本的には、同樣なる刺激に對する同樣なる反應として發生するものにして次して模倣の結果なりとは考へ難し(5)。模倣を盡く除き去りて考ふるもなほ、社會意識は成立し得る餘地あり、これ相似たる反應に負ふ欲望の共通あればなり。相似たる反應を除いて考ふれば、如何に模倣をして自由の勢力を揮はしめむとするも社會意識の成立を見る事能はざらむ。蓋し模倣も無よりして有を作る能はず、均齊の下地なき所に共通の事實を實現する事能はざるなり、たゞ相似たる反應によりて一定の欲望を生ぜむとの下地の共通せる所に於いて、同樣なる欲望を喚び起す事を得可きのみ。

此の如く同樣なる反應は共通の欲望の根柢をなす。然れども第二次的因子の重要もまた決して閑却せらるべきに非ざるなり。人々の生活が單純にして、社會の事情また頗る簡單なる場合に於ては、人人はこれ自然的並びに社會的外圍の傀儡にして、其意識的生活は外圍の事情の一義的函數に外ならず。各自の抱ける所の欲望も

外圍によりて生じたる欲望にして自から作りたる欲望にあらず。而も彼等の間には類似の甚だ著しきものあるが故に、外圍によりて生じたる欲望も、また自から共通なるもの多し。かくて文化の最も低級なる時期に於いては、共通なる欲望の成立の重に負ふ所は同樣なる刺激に對する相似たる反應にあり。然れども吾人の欲望は此生ずる時期より更に進みて作らるゝ時期に入る。

社會の漸次發達するに伴ひて一方刺激と反應との聯絡は直接にして簡單なるを得ず、錯綜し紛糾せる自然的人事的關係は其間に介在して、刺激に對する反應を多義的ならしむ。殊にまた、これに伴ひて、人人は外圍ことに自然の壓迫より幾分か自由となり、日常、必要と困難とによりて追求せらるゝ事なく、生活に餘裕を生じ、從ひて精神的餘力を生ず。此精神的餘力がまた、反應を種々なる方向に變形せしめ、從ひてこれを多義的ならしむ。かくて、目的たる欲望は新しき事情の刺激に會ふも明確にして一義的なる所の手段たる欲望を生ずる事なく、反應する各人の位置境遇の如何着眼點の如何により、略同樣の方向を有しながらも、それぞれ相異なれる欲望を生ずるに至る。而してこれらの欲望は刺激が直接に、而も一義的に發生せしめずして、種々なる人事的事情の介在により變形せしめられたる點より見る時は、まさにこれ、作ら

れたる欲望なり。

然れども、社會の成員のうち、目的たる欲望を最も強く感ずる人あり、また之を感ぜざる人あり。此の差異は一に其居る所の社會的境遇如何、性格如何と云ふ事に歸着す可し。而して、手段たる欲望が明確に意識に上り來るもの――廣き意味に於いて云ふ發明者――はすべて前者なり。目的たる欲望をたゞ漠然と感ずる人に對しては新しき刺激も何等明確なる欲望を生ぜしむるに至らず。此刺激に對する反應としては未だ明確なる欲望とならざる或る一定の傾向を殘すに止まる事多し。而して此傾向は勿論欲望の下地として其が模倣又は其他の過程により傳播すべき可能性を藏し、同一の目的たる欲望より派生せられたる新欲望を移植し之に同化するに至る。

所謂作られたる欲望が、此欲望の下地とも云ふ可き傾向を有する人々の間に、傳播せらるゝ道行の最も重要なるものは、模倣と推理(又は判斷)とこれなり。而して、理知の未だ發達せざる段階にありては、模倣の勢力の大なるを見る。以前の最も自然的なる狀態に於けるが如く、一定の刺激は直接に一定の欲望を喚び起し來らざれども、なほ此刺激に應じて一定の漠然たる傾向はすべての意識に住す。此時此傾向と同

一の方向を有する欲望の暗示として受けらるゝものあらむか、此傾向は一變して、此一定の欲望となりて發動す。かくて、模倣は同時に數多の成員をして同一の慾望を抱くに至らしむれども、此際模倣の同化力は極めて制限せられたるものなる事を忘る可からず。何となれば、模倣は決して下地たる傾向の存せざる所に於いて行はるゝ事能はず。かの傾向が何等か明確なる慾望とならむとする所に於いてのみ、暗示は作用して模倣を生ぜしむ。且つまた、新なる慾望の發生を以て單なる偶然の所產に歸するものあれともそは取るべからず。その發生は目的なる慾望と新しき刺激と結合して始めて行はるゝもの、模倣によりて手段たる慾望の傳播せらるゝ下地の傾向と同一の基礎を要するものなり。要するに模倣によりて手段たる慾望の共通となるに至るは其發生傳播すべて、目的たる慾望の平行と新しき刺激に俟たざる事なし、其根柢をなすものは同樣なる反應なりと云ふべく、模倣の勢力は其上に加はれる副次的のものなりと見ざるべからざるなり。

更に社會の合理化して、人々が理知によりて思惟行動を支配せらるゝ傾向を生じ來れば、推理又は合議の過程が共通慾望の成立に對して意義を有するに至る。一定の刺激は特定の人々に於いてのみ反應として明確なる慾望を生ず。此慾望は、反應

として慾望の下地たる傾向をのみ藏する人々によりて推理を加へ合議に上せられて其中の或ものが遂に多數の成員に共通となるに至る。而も、推理による傳播もまた模倣のそれと同じく副次的意義を有するに止まるものにして、相似たる反應として一定の傾向の存在せざる所、何等の影響をも有し得る事なし。吾人は徹頭徹尾、共通慾望の成立に關しては、平行慾望に本づく相似たる反應を以て最も根本的のものとし、此因子は單獨にて共通慾望を成立せしむるのみならず、模倣又は推理を以て副次的因子となし、相協働して慾望の共通を促すと見るものなり。

かくて、吾人の見る所を以てすれば、模倣を以て一切の社會意識の說明の根本的原理となさむ事は、飽迄不當なり。姑く、模倣の作用する所其根柢には共通の慾望を發生せしむべき漠然たる共通の傾向の存在する事を離れて考へ、模倣によりて同化の行はるゝ際には、此同化を以て全く模倣の力のみと解釋するも、所謂「模倣の社會哲學」はたゞ、社會意識成立の中間段階を說明するに足るのみ、云はゞこれ中間段階の社會哲學にして一般的社會哲學にあらず。近代の如く理知の發達したる時代にありては、一定の目的たる慾望に對しては手段たる慾望をなすもの數多あるが中に爭鬪あり、此爭鬪は暗示模倣の過程の自然的成行によりて勝敗を決せられずして、事ごとに

各人の推理合議の過程によりて、取捨せられ、傳播消滅せむとする傾向あり。更に溯りて、最も自然的なる狀態にありては、既に述べたるが如く、慾望は常に外圍の刺激に對する一義的函數として發生し來りしもの從ひて、共通なる慾望は共通なる反應としてのみ發達し來れり。自然狀態に於いて發生したる風俗習慣言語宗教等が、今日吾人が其何人によりて創造せられたるかを知る能はざるものは、始原の遙遠にして探究の困難なるが故に非ず(6)。同樣なる反應の集合的產物として個人的なる特定の創造者と云ふものゝ在存せざるによるなり。

然れども、吾人は今日を以て理知の時代なりとなせばとて、共通慾望の成立は今や全く推理合議の過程によるとなすものに非ず。模倣の作用の初めて著しきを加へたる時に於いても、同樣なる反應は依然として、よし唯一ならざるまでも最も重なる共通慾望の成立過程なりしか如く、今に及びても、共通慾望の成立は同樣なる反應に負ふもの多し。古き歟立方法は廢れたるに非ず、たゞ其上に新しき成立方法の堆積し來れるのみ。堆積し來れる諸方法は皆それぞれに活動の分野を守りて共通の慾望を成立せしめつゝあるなり。勿論其活動の分野に截然たる分界線を劃せむことは至難の業なり。然れども、概觀して云はゞ、目的たる慾望の性質極めて重大にして

各人皆强くこれを感ずるのみならず、刺激となれる事情の單純なる場合にありては相類似せる反應の容易に共通慾望の形態をとるを見る。換言すれば、吾人の內部にある本能的傾向が直接に激發せられ、而も其發動に複雜なる障碍なき場合には、同樣の反應が共通の慾望を生ずる事、自然狀態に於ける社會に見たると異なる事無し。吾人が一切の慾望は其究竟の根柢を本能に有せざるものなしとするも、其手段の更にまた手段として生じたる慾望あり、そは、よし一の目的として意識せらるゝにもせよ重大の性質を缺き極めて任意的人爲的性質を帶ぶるものなり。刺激に對する反應がかゝる慾望によりて發する時に於いては同樣なる反應は共通慾望を生ずるに足らず。そが成立は重に模倣の協働作用を俟たざる可からざるなり。目的たる慾望の性質重大にして、而も刺激となれる事情の複雜なる場合は最も多く理知の作用する所なれども、其作用は啻にかく局限せらるゝ事なく、其發達するにつれて模倣の作用範圍を侵し共通慾望の形成に於ける最も有力の因子たらむとする傾向を示せり。

此の如く、共通慾望の成立樣式は同樣なる反應、模倣、推理の三者を出でず。而も、此樣式の何れによるにせよ、全社會に亘りて一定の慾望が共通となる事は割合に稀な

り。此共通の程度如何は一に社會の成員の同質性の程度によりて決定せらるるものなるが社會が最も自然的なる狀態にある間は相互の類似最も大に、從ひて共通の慾望は社會の殆んど全成員に亘れり。思ふに人は「理知に於けるよりも情意に於いて相類似し」ことに本能に於いて相類似す。自然社會に於いて見らるゝ慾望は多く四圍の事情が成員の本能を刺激して直接に發動せしめたる結果にかゝる。かくて慾望が一の成員に生ずる場合には同時に他の一切成員に於いてまた生ぜるを見るなり。社會成員の分化極めて少くして相互間の類似の特に著しき事は益此傾向を助長するものと見る可し。これと正「反對の事實はこれを征服國家に見る事を得可し。征服者と被征服者とは其有機的心理的性質に於て遙に相異なり、其上に社會上の利害關係の相容れざるものあるが故に、其一方に共通なる慾望は常に他の一方の排斥する所にして、他の一方の希求する所は此一方の不利とする所なり。此二の極端を同時に包藏したるものは文明社會なり。人文の發達其極に達するに及べは、成員間に所謂異質的連續、同質的異質の存するを見る。生活の或方面に於いては原始社會に見たるが如き類似の奥深く潛めるものあり、而も其表面に於いては個性の差異、文化內容の差異、利害關係の差異、最も著しく現はれ萬人互に萬人の敵を形れり。

從ひて類似の著しき或る方面を除き、一般に就いて云へば、一部の成員に共通なる慾望に對しては、必ず社會の他の一部に於いてこれを不利とするものあるべく、全社會の成員に共通なる慾望は殆んど存立の餘地なし。かくて前に掲げし三の樣式によりて、全社會に略共通なる慾望の成立を見るは、たゞ原始の社會のみ。其他の社會ことに近世の社會にありては、如何なる慾望もたゞ成員の一部分に共通なるを原則とす。然るに、如何なる社會にも社會意識の成立を見ざる事なし、而して社會意識は慾望の社會成員の殆んど全部に共通なりとの意識を豫想す。たゞ一部の成員に於いてより共通たり得ざる慾望が如何にして殆ど全部の成員に共通なりと意識せらるゝを得るか。社會意識成立の問題の興味は此一點に集中す。

こゝに於いて吾人は再び形式としての社會意識の性質に注意せざるを得ず。吾人は常に共通なる慾望の存在すべしと信じ、また、此慾望に背かざらむことを社會によりて要求せらると意識す。故に、吾人を威壓し拘束する社會意識の存在は常に意識せられつゝあり、たゞ、未だ其內容の如何なるものなるかが知られざるのみ。此點より云へば、此單なる形式そのものが力を有する事、生れざる王者の力を有するが如し。世襲によりて王位に卽く可き母胎內の王子は、その如何なる人なるや未だ知ら

れざる間に人皆これに對する服從を豫期す。吾人は生れたる王者の性格如何を見て服從と否とを決するに非ず、王者の生誕は吾人は服從すと云ふ命題に特定なる客語を加ふるに過ぎざるなり。これと同じく、慾望が共通なりと信ぜらるゝに及びて社會意識の內容となると云ふ事は、そが新にSocial consciousness isの命題を作るものに非ずして既存の命題Social consciousness is に this that を附加するに過ぎざるなり。進みて注意す可きは、臣下の服從は胎內の王者の形態性質を變化すること能はざれども、形式としての社會意識の存在――――成員者の社會に對する服從――――は其內容の決定の上に著しき影響を及ぼすものなり。一定の慾望はそが形式としての社會意識の中に入りこむ事によりて、社會意識の內容をなし、初めて拘束の力を有すと說きたるが、この二者を結合せしむる動力の重要なる部分は形式としての社會意識其物にあり。そは實に死したる形式として、第三者が一定の內容を其中に投ずるを俟つに非ず生きたる形式にして自ら一定の內容を採取し改鑄して社會意識の內容と轉化せしむ。其過程はそもそも如何。

こゝに於て、吾人は社會成員の內部に二種の種類を認めざるべからず。そは一定の共通慾望に關する發表的部分にして他は沈默的部分なり。前に述べたるが如き

過程によりて、成員の一部に共通なる慾望を生ずるが、此慾望がかく共通なる事は自ら其慾望の支持者によりて發表せらる。此發表はもとより必ずしも意識的のものゝみに非ず、慾望傳播の過程が自ら同時に發表の過程たる事あるべし。從ひて、此發表は必ずしも近代的形式をとりて言說文章による事を要せず、否あらゆる時代を通じて最も普通なるものは行爲動作による發展にあり、而して此實際の行動による發表は最も有力にして影響大なりとす。勿論同一方面に關し數多の共通慾望あらば、皆それぞれに發表せらるべき譯なれども、事實は必ずしも然らず。各の慾望はそれぞれに異なりたる發表力を有す。此發表力は能動受動の兩方面より決定せらる。能動の方面より見れば、此發表力は慾望の支持者の之を發表せむとする强みによりて決定せられ、此强みはまた慾望そのものゝ性質によるところもあれど、重にその支持者の如何によりて決定せらる。勿論、慾望そのものが、在來の社會意識の內容と親密の類緣を有する場合にそは發表力に於て優勢(ドミナント)なり。然れども、慾望そのものゝ性質より離れて考へむか、慾望の發表力は其支持者が優勢なりや否やによりて決定せらる。社會的地位の作用なき場合に於いては、其性格及能力に於いて優越したるもの發表力强く、社會的地位の作用ある時に於いては、强者のやがて發表力に於いても

優勢なるを見る。社會的の弱者は、或は其言說主張を壓迫せらるゝか、然らざるも、其發表のために或は禍を買はむことを恐れて、其支持する一部の共通の慾望をも或は之を秘するか、然らざるもこれを高調して特に社會の注意をひく事なし。受動の方面に就いて見るも强者は常に社會成員の注目の焦點たり、從ひて其支持する慾望は自ら之を發表するの意志なき場合に於いても自然に民衆の注意を惹き、力をこめて發表したると同一の結果を生ぜむ。所謂上の好む所下これより甚しきは無し。下級の弱者の慾望に至りてはその力めて發表せむと努力する時にありてすら、衆人の之に注意するものなく、偶まこれを知るも多くは輕侮と嘲笑の裡に葬らる、そが到底社會的の勢力とならざるを豫期すればなり。かくて、各の共通慾望は皆それぞれに發表力を有すべきに拘はらず、一部の慾望の發表力は睡りて現はれず、事實に於て强く發表せらるゝものはたゞ發表力の優勢なる慾望なり。而して一定の共通慾望が發表せらるゝに當りては、成員中の發表的分子以外のものの中には勿論亦、同化の過程によりて此慾望の共通に與かるに至るものも少からざるべし。然れども多數の人々はすべて沈默的態度をとる。社會意識の成立の秘密は此沈默的分子にあり。一定の慾望の共通なりと云ふ事實が先づ成員中の發表的部分によりて發表せられ

むか。此時形式としての社會意識が其著しき勢力を揮ひ來るを見る。社會には各人の必ずや從はざる可からざる共通慾望ありと云ふ意識の豫め支配するものあるが故に、一たび一定の慾望の共通的なることが發表せらるゝや、皆存在を豫期したりし慾望を以てこれなりとなし、自己個人の微力到底これに反對すべからざるを思ふ。

かくて發表的分子以外のものは殆んど皆沈默す。各の沈默的要素は各人の反對せざるを見て愈これ社會の全部に共通なる慾望なりと考へ、そは完全に社會意識たる性質を有し拘束力を得來る。かくて沈默的要素は必ずしも此慾望の共通に與る者に非ず、反對の慾望をすら有するものもあるべけれども、其慾望の拘束に甚だしき不便を感ぜざる限り、否時には苦痛を忍びても、何等反抗する所なく、其言動を模倣して一見全然其慾望の共通に與る如くに見ゆ。これを呼びて、社會的擬態と稱する事を得べし。彼等は社會の壓迫を免れむが爲に同化したるが如き外形を呈するなり。而して、該慾望が全社會に共通なるが如くに見え、社會意識としての力を得るもの全くこの擬態による。而して、此擬態を强ふるものは形式的社會意識これなり。かるが故に、形式としての社會意識はたゞに全成員に略共通なりと見ゆる慾望內容を其中に攝取して、これを社會意識化するのみならず、其慾望を共通なりと見えしむる動

力なり。或る意味に於いて、形式としての社會意識は其内容を創造すと云ふ事を得可し。「共通なるが故に社會意識をなすに非ず、社會意識なるが故に共通なり」(註)。

(註)こゝに云ふ發表、ならびに發表的分子については、誤解を避くるため豫め一言の説明を加ふるを要す。この發表、發表的分子は必ずしも能動的發動的なることを要せず。自ら一定の欲望の共通性を辨明する事は勿論固有なる意義に於ける發表なり。然れどもある一定の欲望内容が例へば模倣によりて廣く社會に傳はるに至り、その大部分が此欲望に同化したる際に當りて、欲望の支持者に共共通を示す意志なくも、社會の成員の漸次共共通なる性質を認むるに至る時は、こゝに發表は受動的に行はれたりと見るべく、其支持者は發表的分子となる譯なり。たゞ此際欲望が如何なる程度まで共通性を得來る時に於いてはじめて、その共通と云ふ事實が注意せられ、所謂發表せらるゝやそは全然決定しがたき問題なり。欲望の性質、成員の複合性その他種々の事情によりて差異ある可し。

今、社會意識の内容となる欲望の側よりして考へむか。そは必ずしも成員の殆全部に共通なるものには非ず、往々にしてこれと同等の普遍性を有する他の欲望のならび存する事あり。而も、そが一たび發表せられて、形式的社會意識の中に入り、其内容を形るに至るや、此後者の有する力を代表す。此力によりて、社會成員中の異分子を征服し、他の欲望を驅逐し去りて、社會的擬態の現象を生ぜしめ、全く普遍的性質を有するに至るが如くに見ゆ。形式としての社會意識を譬ふれば、空虛なる城砦の如

し。先づこれを占領するのは此堅壘に據りて敵を風靡する事を得可し。これと戰はむとするものは、野戰に非ずして、攻城戰の酸苦を嘗めざるべからざるが故に、豫め屈伏するを常とす。換言すれば、一定の欲望が社會意識の內容をなすに至れば、成員間に多少共通なりし他の欲望は、これによりて壓迫せられ暗に葬られ去るものなり。此關係を稱して社會意識に關する先者優勝（プライオリティ）の法則と云ふ。

此の如くにして成立したる社會意識の內容は持續的性質を有す、一たび成立するや、容易に消滅し去る事無し。此持續的性質は一に其自己生產的過程による。社會に存在する資本は刻々に消耗し去れども、刻々にまた同額の富を生產する事により、換言すれば自己を再生產する事によりて補塡せられ、決して消滅し去る事なし。また人口は死亡によりて刻々に減少すれども、刻々に自己の生產卽ち出生の行はるゝ事によりて其數を維持する事を得。これと同じく、社會意識の內容たる共通欲望はまた自己を生產する事によりて、其消失を免るゝものなるが、かゝる自己生產は、此場合、單に形の上より見れば、同樣なる刺激に對する同樣なる反應として行はれ、更に實質の上より見れば、社會意識そのものゝ拘束力によりて生ず。既に存在する社會意識の內容が全成員の上に一の共同なる刺激となりて、刻々に同一の內容を抱かざる

を得しむる點より見れば、これ共通なる反應なり。而して、既存の內容が拘束力を有するが故に、成員はみなこれより免れず、他の欲望を抱かむとするも禁止せられ、たゞ此內容を有する事のみを許さるゝが故に、自ら同一欲望の共通は持續せられ、此持續せられたる共通慾望はまた社會意識としての拘束力を有するが故に同一の共通慾望を生ず。此過程はたえず反覆せられていつまでも續く可き傾向を有するなり。此際社會の成員の實質は或は出生死亡により、或は來往住により、出入と代謝とを見る事あるも、此自己生產には變化なし。勿論成員の實質の變化は其慾望に多少の變動を生ずる傾向あるべき事云ふまでもなし。然れども生死も移住も漸次に行はれ、變動せる成員分子の勢力はこれを全社會に比するに微々として云ふに足らず。社會の命ずる慾望を抱かざらむと企つるも微力何の奏効あらむ。かゝるが故に、成員の實質全く變ずるに至るとも、社會意識の自己生產は依然として持續せらるゝ傾あるなり。

事實の社會に就いて見れば、社會意識の內容をなすものは重に傳說なり。傳說又は習慣と云ふものは畢竟久しき自己生產過程を經たる社會意識に外ならず。前に述べたる社會意識成立の過程は僅に、此傳說に加はる新內容の創造、及び新しき社會

事情に適せざる傳說の改造に於いて作用するに外ならざるなり。而して、社會の事情の根本に於いては略不變なる事は、また、かゝる成立過程の作用を著しからしめず、其結果如何なる社會にても、社會意識の主たる內容をなすものは常に傳說なり。而して、此傳說は上揭の如く、社會事情の變化に伴ひ、必要に應じては改變せらるゝものなるが、其持續力の大なる結果として、此應化の力は極めて小なるを常とす。新しき社會的事情の發生ありて、各成員の慾望に變更を來したりとせよ。而も、舊き社會意識の內容は一種の壓迫を以て同化を成員に迫る。社會意識の內容は既に其支持者たる各成員を離れて表象せられ、社會のものとして考へらる、所謂社會化せらるるなり。而して、これに反抗せむとする成員の欲望は、勿論多數の人のこれを抱けるにもせよ畢竟一々個人の欲望に外ならざるなり。その個人を以て社會に對す、其及ばざるは明なり、故に各人は社會的擬態に隱れて、表面社會意識の內容に從ふ。往々にして社會の多數は反對の欲望を抱きながら舊來の社會意識に從ふことあり、これ、傳來の內容、各、他人の必ずやこれに服從すべきを思ふによるなり。而も此時反對の欲望は社會に瀰漫す。新しき社會意識內容はいま潛在的狀態にあり、一たびその多數に共通なるを意識しその共通の發表せらるゝに及ばゞ舊きもの直ちに滅びて新しき

もの現はれてこれに代らむ。此の如く、潜在的なる社會意識の裏面に潜みて、而も、顯在的なる社會意識の滅びざる間は少しも表面に現はれず、其消滅の時到れば、直ちに現はれて顯在的社會意識となる、これ花辨の内なるものは外なるものゝ萎み落ちざる以上、外に形れず、而も内部にかくれて、充分に發育せると似たり。これを呼びて社會意識に關するペタリズムと云はむ。此ペタリズムは啻にかく、舊慣の滅びむとする場合に限りて存在するものに非ず、程度の差こそあれ、あらゆる時に於て然り。

社會意識の自己生産は他に何等の事情を俟たずして、なほ不斷に行はるべき運命を有す。然れども、事實の社會に於ては常に、都合よき他の事情の協働するものあるを認むべし。所謂社會意識の物體化卽ちこれなり。こは時に社會意識の客觀化又は客觀精神の名を以て呼ばるゝ現象の一部分なり。社會意識の内容は時としてそのまゝ文書に記錄せらるゝ事あり、或は其作用の結果として生じ、又は其作用の條件として作られたる物質の存在する事あり。法典經典を初めとしたる諸種の記錄、寺院、學校、病院、紀念像等より道具機械、さては、人文的意義を有するに至れる自然の風物に及ぶ。これらのものは大抵、一定社會意識あるによりて生じたるものにして、直接又は間接に、此動力たりし社會意識の内容を周知せしむ。而も、これら物體化せられ

たるものゝ與ふる知識は明確なるのみならず、强烈なり。社會意識の內容は物體化せらるゝに及びて、意識內容として理解せらるゝのみならず、そは物體としての存在によりて吾人の理解を强制す。また、社會の是認は此物體の存在によりて明に意識せらるゝのみならず、其莊嚴其宏大は此意識を强烈ならしめ、時に詩的宗教的の背景を與ふ。勿論、此等の物體はその伴へる一定の社會意識內容の消滅したる場合に於いては、殆んど其勢力を失ひ、僅に幾分の潛在力として、後代に於ける同一內容の復活を誘致するのみ。社會意識を以て個人意識と離れたる客觀的存在を有し、後者滅ぶるも前者なほ存ず、其存するは客觀化せられたる物體としてなりとなすが如き思想は、所謂客觀精神の作用を誇張して誤謬に陷れるものなり。而も、社會意識の自己生產が此物體化によりて助長せらるゝ程度に至りては推知すべからざるものあらむ。此意味に於いて吾人は云ふ、一の宗教の滅びざるは寺院と殿堂との朽ちざるが故なり。一の儀式の滅びざるは禮裝の自ら燃え自ら沈まざるが故なり。

社會意識の自己生產過程に關して、なき注意す可き一の事情あり。そは傳說の古さが拘束力を強めて其自己生產を容易ならしむる事これなり。傳說若くは慣習の勢力は其古さと共に加はると考へらる。社會の事情が合理と改新とを覓めて古き

を排する時に當り、此勢力の急に衰ふるのみならず、古きものほど亡び行く傾を示すとも、そは此法則に對して何の例外をもなすものに非ず。他の事情によりて作用する他の法則の結果が一の法則の齎す結果と干渉し相殺する事は最も普通の事實なり。傳說の實際に於いて有する拘束方は其根據を啻に社會的擬態にをけるのみならず、また、此古さに伴ふ權威の上に本づけり。然らば、此古さの權威は如何なる過程によりて發生し來るや。之を以て集團的暗示の力に歸せむとする學說あるも、吾人はこれを以て充分なる說明原理なりと信ずると事能はず。暗示の効力は其集團的なるだけ强し。然れども、社會意識の拘束的性質は此暗示の勸奬的性質を以て說明し得らるべきに非ず。然らば、社會意識の共通の範圍と云ふ事よりして此權威を說明し得べきに非ざるか。吾人の見る所によれば社會意識の拘束力の本づく所は成員の力にあり、支持する成員の力の大なる時其拘束力亦大ならむ。然れどもこはなほ、傳說の權威の說明に何等の便宜をも與へず。傳說の背後に控へたる支持者が他の社會意識內容のそれに比して多きは、そが死したる人を含むが故のみ。而も、死したる人は祖先崇拜の行はれざる限り何等拘束の實力を有せざるなり。吾人の見る所を以てすれば、慾望は其連續の間より一の壓力を生じ來る。而して、連續が時間的

なると空間的なるとを問はず其大さと之より生ずる壓力の大さとは相比例するものなり。空間的連續、卽ち多數成員に慾望の共通なる場合に於いては、此壓力たる常に拘束力となりて現はれ、其强さが團結せる社會成員の數に比例する傾あること、既に說きたる所の如し。時間的連續にありては、此壓力たる、それ自體拘束力の形をとる事無くして、たゞ其慾望の强度の增進となる。一定の慾望が不斷に現はれ不斷に滿足せらるゝ場合に於いては、この道行によりて、慾望の强度の益增加するを見る。蓋し、この反覆せられたる努力と滿足とは、一方に於いて心理的ならびに生理的惰性を作り慾望を生ずべき必要なきに及びても、自らこれを生ぜむとする傾向を促すなり。また、人の本來保守的なる本性は、一定の慾望及びこれに本づく努力によりて其所期する目的を達し得たりとせば、此慾望に對して手段としての高き價値を認む、而して此慾望と努力とを變更せしめて不安と危險とに向ふを好まず。此二種の事情は反覆せられたる慾望に壓力の要素を加へ、此慾望を已むべからざるものとなす。此壓力の添附はその慾望の個人的に止まる間は何等の拘束力をも生ずる事なかるべしと云へども、それが社會意識の內容をなすに至る場合にありては然らず。內容たる慾望の强度を增加するが故に、成員に對する要求の程度を强め、自らまた、拘束力そ

のものを強からしむべし。時間的連續に伴ふ壓力は慾望反覆の年代の古き丈け強かる可きが故に、拘束力の強さもまた其古さと相比例せむ。

此事實は社會的擬態の事實とともに、社會意識の目的に關して重要なる意義を有す。社會意識の作用は常に社會の成員を拘束して其行動思惟を一定の方向に導くにあり。此拘束の結果は之を客觀的に見來る時、呼びて社會意識の目的となす事を得可し。而して、社會意識內容の成立及び其變更に就いて、社會の全成員は其全權を有す。少くとも成員の大多數の意志に背いたる目的を有する所の社會意識は決して存在を許されざる可きなりかくて、社會意識の目的は全社會成員の利益にありと云ふ事を得可し。然らば、吾人は無制限に此命題を是認する事を得るかと云ふに然らず。試みに現在の社會に於ける社會意識の內容を檢覈せよ。自由と云ひ正義と云ひ公平と云ふが如き原理は常に社會意識の規範の中心生命をなせるが如きも、此の如く斷言して已むことあらばそは皮相の見なり。階級の階級に對する絞取、弱者の强者に對する服從の事實は今の社會意識によりて是認せられつゝあるに非ずや。社會意識の此絞取的性質のより來る所抑も如何。社會意識は成員大多數の慾望によりて決せられ、而もその決定に當りて各成員の有する決定は甚だしき相違なし。

然るに、此の如く殆んど決定の全權を掌握せる全社會成員の力によりて、其多數の利益を無視し一の少數者階級卽ち强者階級の利益のみを特に助長する規範內容が如何にして成立するを得たるか。

此奇怪なる事實を說明するものはたゞ社會的擬態の現象あるのみ。社會が極めて同質的にして强弱の區別殆んど存せざる場合にありては、慾望の共通たる完全に近く、各成員の要求は各其反映を社會意識の中に有する事を得。社會の異質性漸く加はれば、幸に慾望の共通を見たる成員のみは其要求の反映を社會意識の中に有すれども、然らざる部分は、其要求の全然壓迫せられたるを見る。卽ち、社會に異質の存在するところ、社會意識の新なる成立は常に一部成員の新なる犧牲を意味す。此犧牲の最頻繁にして重要なるものは弱者階級の要求の壓迫卽ちこれなりとす。思ふに社會意識の新しき內容の成立は常に必ず、先づ發表的分子による發表を豫想す。而して、此發表の任に當るものは社會に於ける强者の階級なり。爾餘の階級は發表せられたる內容を以て、これ社會全體の要求なりと考ふるが故に、擬態の態度に出づ。大多數の成員はよし各個人として皆反對の要求を有する時に於いてもなほ、相恐れてこれに贊同す。かくて、强者によりて發表せられたる慾望、卽ち、絞取的關係を辯護

し助長せむとする慾望も全部の成員の外見上の一致を得るが故に、こゝに社會意識の內容をなし拘束力を得るに至るなり。而して、時間的連續の作用其上に加はるによりて、更に一層の鞏固を加ふ。絞取的目的を有する社會意識內容が一たび成立してより其自己生產的過程によりて傳はる事久しからむか。時間的連續の他の場合と同じく、一種の壓力を伴ふに至る。此壓迫は重に生理的心理的惰性の作用にして、其慾望そのものが全く自己のものとなり終り、該慾望が多數の成員間に共通なりと云ふ事も、今や、擬態の結果に非ずして全く自發的となるに至るなり。かくて、絞取的目的を有する社會意識內容は其拘束力を以てして弱者に何等の苦痛をも與へず、所謂「自然法」「道德律」の內容を形づくるに至るなり。たゞ、社會意識の目的の中、此絞取的目的と社會利益の目的との間に存する本未强弱の關係に至りては今これを明にするを得ざるを遺憾とす（五、二、二六夜）

(1) Davis, Psychological Interpretation of Society 1909. p. 72.

(2) 拙稿　社會意識とは何ぞや　（國民經濟雜誌第十六卷第五號）
　　拙稿　社會意識の拘束力を論ず　（京都法學會雜誌第十卷第六號）

(3) dugegon: Giddings, Principles of Sociology. 1907. p. 134.

(4) dugegon: Davis, op. cit; Giddings etc.

(5) dagegen: Tarde, Les lois de l'imitation; Ross, Social Psychology; etc.

(6) dagegen: Tarde, op. cit; Nòvicow, Conscience et volonté sociales; etc.